ときには、辛口

23 最終回

◇紆余曲折

松本道介
Matsumoto Michisuke

「ときには、辛口」という文章を五年近く二十三回にわたって書かせて頂いた。今回が最終回になるが、読み返してみると、自分の子供の頃のことをよく書いたなあと思う。

老人に話をさせると昔のことばかり話すというのは、大昔からの相場であり、私も、そんな老人の一人にすぎなかったのかもしれない。

ただ、少しだけ弁解させて頂くなら、私には〝昔はよかった〟式の回顧趣味はない。では、なぜ私が過去を思い出すかといえば、自分が僅か七十年ほどのあいだに経験した紆余曲折の大きさにあきれているからである。

紆余曲折といっても、私自身の人生はごく平穏だった。格別の不幸や不運にも会わなかったし、良き出会いにも恵まれた七十年だったと思っている。

敗戦から東京五輪、高度成長…

しかし私の生きた時代の紆余曲折はたいへんなもので、まずは最初にアメリカとの大戦争があり、全国の大都市が空襲で焼かれた上、広島、長崎に原爆を落されての大敗戦があった。幸い私は山陰の静かな田舎に疎開していたから怖い思いはしなかったものの、戦争末期から戦後の十年は食べるものも乏しくすべてに貧しかった。

その貧しさから脱け出したのが一九六四年の東京オリンピックあたりだろうか。私が現在くらす杉並区でいえば、少し雨が降るとすぐに水たまりの出来る昔ながらの道路が突貫工事で幅をひろげて舗装をし〝環状八号線〟に大化けすると、同じ頃に大阪までの新幹線が開通して日本初のオリンピックが始まった。

このあとは高度成長というのか給料は毎年のようにあがる感じだったし、テレビに洗濯機に冷蔵庫は誰もが持つようになった。成田空港が開港した七八年頃には欧米へ出かけるのはごく普通のことになってしまった。

クルマなどもオリンピック以前は夢のまた夢であった。クルマは富豪の持ちもの、おかかえ運転手の運転するものという固定観念があったせいだろう。一家に一台になり、一人に一台となる時代があっという間に来てしまうことなど誰が予想したろうか。

いろいろな夢が次々に実現してしまうと、次第に感覚が麻痺してきたものの、すべては人類史上の初ものづくしである。カラーテレビにケータイ、クルマに飛行機に人工衛星すべてが、人類の歴史をどれだけさかのぼろう

とも存在したためしはなかった。

それはあきらかに進歩発展の上昇線であり、人類はその上昇線を僅か五十年くらいのあいだに頂点まで駆けあがってしまったらしい。

頂点を過ぎた「先」

今、頂点と書いたが、頂点などまだまだ先のことだという人もいるにちがいない。しかし私は二十世紀の最後の五年あたりから頂点を感じるようになった。頂点の先は下降線であり、退歩衰退が控えている。

なぜそんなことを感じるようになったのか。バブル崩壊とか神戸の震災やサリン事件等がきっかけになったと思うが、個人的には、自分の両親と妻の両親の死や病いや介護に対面させられたことが大きい。その経験の中で今どれだけ多くの、魂の抜け殻とも言うべき老人が生きながらえているかを思い知らされた。そうした老人の数は、今後増えることはあっても減る気配はない。自分も将来その仲間入りをする可能性がある一方、若い世代にかかる負担は重くなるばかりである。

これは単に老人問題というにとどまらず、人間生態系の崩壊であろうし、また我々が享受している文明生活自体が地球生態系の破壊にほかならない。あるいはまた、学校におけるいじめや学級崩壊、離婚という名の家庭崩壊、これらとも密接にかかわる少子化の進行を見れば、この数百年、西欧を中心に進められてきた人類社会の進歩発展は何であったのか。当の進歩発展のもとになった近代ヒューマニズムさえ根底から疑わなければならなくなってくる。

近代ヒューマニズムというと一般には人間主義と翻訳されるから、ごく穏やかな暖かなもののように見えるが、石川英輔の「大江戸リサイクル事情」（講談社文庫）のなかに人類中心主義という訳語を見つけて目の醒める思いをした。

石川さんは人類中心主義という訳語から、近代の進歩発展がすべて現人類（しかもその一部）の利便快適のためであったと書いておられる。つまりこの目的のために人類は動植物をはじめ地球環境のほとんどを犠牲にしてきたのであり、さらに環境の悪化が進めば、やがては後世の人類をも犠牲にするだろうことを示唆している。

さらに環境の悪化が進めば、と言ってもすでにとりかえしのつかないほど悪化は進んでいるのかもしれない。先頃アメリカの元副大統領ゴアが出した「不都合な真実」（ランダムハウス講談社）を見ると地球温暖化によって氷河がどれだけ後退したか、海面上昇がどれだけ進んだかをはじめ、近い将来に来るであろうさまざまな天候不順から大旱魃の可能性までがなまなましく説かれている。

江戸という〝植物国家〟の智恵

一方、今触れた「大江戸リサイクル事情」は、鎖国を続けた江戸時代の日本人がいかに完璧なリサイクルをなしとげたかを教えてくれる。むろん昔の日本にリサイクルという言葉はなかったが、江戸の日本は〝植物国家〟であり、衣食住のほとんどすべてを植物で賄っていた。すべてを土に返して植物を育て、その植物で生きることによって、後世つまりわれわれの時代にいっさい害を残さなかった。

われわれは江戸時代に帰ることはできないが、間もなく襲いくるさまざまな苦難に対処するため、この尊敬すべき先祖の智恵に学ぶところはたいへん多いような気がする。

＝おわり

（中央大学名誉教授）